多賀城廃寺跡（たがじょう）

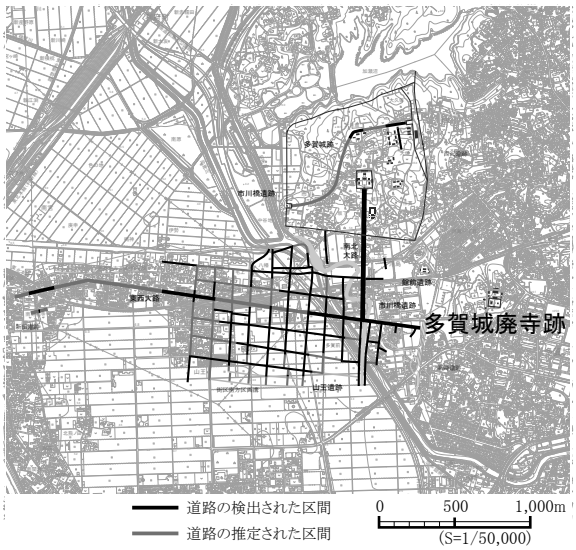
宮城県教育委員会　廣谷和也

所 在 地　宮城県多賀城市高崎、坂下地内

立地環境　仙台平野の北端、南西側に舌状に張出した標高約 18 m～ 21 mの丘陵上

発見遺構　講堂、築地塀、塔、金堂、大房、小子房、東倉、鐘楼、西倉、礎石建物、掘立柱建物、柱列、竪穴建物、土手状遺構、建物基壇、盛土整地、溝、土坑、瓦を多用した特殊遺構

年　　代　８世紀前葉～ 12 世紀頃



第１図　多賀城廃寺跡の位置

遺跡の概要

多賀城廃寺跡は、仙台平野の北端に位置し、松島丘陵から南西側に舌状に張り出した丘陵上に立地する（第１図）。多賀城跡政庁からは東南約 1.2㎞に位置する。当廃寺跡の発掘調査は、宮城県教育委員会による昭和 36・37 年の調査、多賀城町による昭和 41 ～ 43 年の調査（宮城県・多賀城町 1970『多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡－』、以下『多賀城廃寺跡』）、宮城県多賀城跡調査研究所による昭和 50 年の調査（多賀城研 1976『年報 1975』）等が実施されている（第２図。以下、調査成果について特に断りがない場合はこれらの報告内容に依る）。多賀城との密接な関係が認められ、大正 11 年に多賀城跡が史跡に指定された際一括指定を受け、おなじく昭和 41 年には特別史跡に昇格している。

伽藍配置は、講堂と中門を築地塀で長方形に連結して外部と区画し、区画内部には東側に三重塔と考えられる塔、西側に東面する金堂が配置される「観世音寺式伽藍配置」（斎藤 1975、石松 2007、貞清・高倉 2010）である。中門の南側でも広範囲に発掘調査を実施しているが、南大門は未発見である（第３図）。

講堂の北側には、講堂と中門を基準とした中軸線上に大房と小子房が小子房を北として南北に揃えて配置される。その東西には東倉・西倉、西倉の南側には経楼があり、東倉跡の南側には鐘楼が想定される。いずれも築地塀東西辺の北側延長上に位置する。これらの建物のほかに、築地塀西辺の西側には西方建物、南西側には西南建物があるほか、西倉の北西側には一辺１mを超す柱穴により構成される柱列等がある（多賀城研 2008『年報 2007』）。また、中門の南側では、竪穴建物が６棟、瓦を多用した特殊遺構１基などが見つかっているほか、土手状遺構、建物基壇、盛土整地、溝、土坑などが見つかっている。

当廃寺跡は、所在地の地名を用いて「高崎廃寺跡」とも呼称されていたが、発掘調査により多賀城の創建に付属して造営されたことが明らかとなったため、主に「多賀城廃寺跡」の名称が多用されている。

１．発見された遺構

（１）伽藍地

【塔】　基壇は、基部一辺約 30 m、頂部が 14 ～ 15 mの丸みを帯びた截頭方錐体状の盛土による土壇上に築かれる。高さは金堂・塔中間地点の最低標高部から測って約 3.4 m（遺構の各数値は、報告書中の数値を元にm・cmともに小数点第一位までの表記とした。以下同じ）であり、金堂の基壇より約２m高い。創建時の基壇は一辺約 11 mの方形、高さ最大 1.2 mで、凝灰岩切石による地覆石・羽

目石・隅束石により縁取られる。羽目石上端の内側から礎石側柱外側までの範囲には、凝灰岩切石による敷石が施される。この基壇はその後、羽目石の外側に幅 85 ～ 90cm、高さ約 80cm の盛土を施してその上面に人頭大の玉石を敷いた犬走りと、その外側幅約 80cm の凝灰岩片と瓦片を敷き詰めた雨落溝をもち、雨落溝の外縁を凝灰岩で縁取った基壇に補修されている（第１次補修）。さらにその後、犬走と雨落溝の上部に粘土層による補修がされている（第２次補修）。第２次補修の後、基壇上面敷石の一番外側の石材を外して創建時の基壇の拡張を図るための改修がみられるとされているが、その詳細は不明である。なお、第２次補修の上面からは焼土・木炭・焼瓦が出土している。残存する踏み石等の石材や、羽目石が途切れる箇所等の存在から基壇の四辺に階段が存在したものと想定されている。また、土壇西側中央には第１次補修基壇に伴う壇下までの階段が確認されている。

建物は、心礎を中心とした四天柱と、その四周に３間×３間の側柱をもつ平面正方形の塔である。17 個全ての礎石が残存しており、いずれも安山岩である。側柱礎石の中心間で１辺約 6.2 m、柱間間隔は 2.1 m弱である。心礎は東西 1.6 m、南北 2.6 m、厚さ 1.0 m以上で、平滑にした上面の中央に、中心柱を受ける径 59.4cm、深さ９cm の円孔が穿たれている。側柱・四天柱は、いずれも柱座は設けられていないが、柱が乗る上面を平滑にする等の簡易な整形が施される。

【金堂】創建期の基壇は版築により構築し、上面に凝灰岩の切り石を敷き詰めたものとみられる。その後、切り石の外側をかさ上げしてその外縁を安山岩により２列に縁取り、２列間の平坦面に凸面を上にした平瓦片を敷き並べて雨落ちとする基壇に補修されている（第一次補修）。創建期基壇の規模の詳細は不明であるが、一次補修後の基壇の規模は、東西長 19.3 m、南北長 22.6 mで高さは約 0.8 mである。一次補修後の雨落溝や基壇東側の瓦敷きの上面に粘土貼りが認められることから、一次補修された基壇がさらに補修された（第二次補修）可能性がある。

建物は桁行５間、梁行４間の南北棟礎石建物である。桁行の柱間間隔は北から 2.4 m、3.0 m、3.0 m、3.0 m、2.4 mで、総長 10.4 m、梁行の柱間間隔は東から 2.4 m、2.8 m、2.8 m、2.4 mで総長 13.7 mとみられる。礎石は柱座を意図したとみられる平坦部を作り出しているものが１点あるが、大半は明確な柱座が認められない。柱が乗る部分を平滑にする等の簡易な整形は施されているとみられる。

【講堂】創建時基壇の詳細は不明であるが、縁辺は凝灰岩の切り石積みのものであったとみられる。その後安山岩の河原石を周囲にめぐらした基壇に改修されており、改修後基壇の規模は、東西が 18.8 m、南北が約 31 mで高さは 0.3～0.9 mである。基壇南辺と北辺ともに中央やや東寄りの箇所で安山岩の平石を積んだ階段が見つかっており、南辺は２段で幅 2.3 m、高さ 0.3 m、北辺は３段で幅 1.5 m、高さ 0.6 mである。また、基壇北側と西側には幅 0.8 ～ 1.0 mの平瓦を用いた瓦敷が施されている。

創建時の建物は桁行８間、梁行４間の東西棟礎石建物である。桁行の柱間間隔は東から１間目と８間目が 3.0 m、それ以外が 3.4 mで、梁行の柱間間隔は北から１間目と４間目が 3.0 m、それ以外が 4.0 mとみられる。基壇付近の焼土・焼瓦などから多賀城政庁跡第Ⅳ期以降に火災に遭っていることが判明しており、その後基壇中央部北寄りの箇所に金堂的性格を持った仏堂と考えられる桁行５間、梁行４間の礎石建物が建てられている。

【築地塀・中門】築地塀の長さは南辺が 81.7 m、西辺が 56.4 mで、東西方向に長い長方形を呈する。幅は、基底部両端に並べられた河原石が残る箇所は 1.8 m、寄柱（報告書中では「須柱」と表現、報告文と写真図版から寄柱（奈良文化財研究所 2003）と判断）が残る箇所では 2.1 mである。寄柱は礎石式と掘立柱式の両者がある。築地塀の北辺は講堂南から二番目柱列付近、南辺は中門の中央付近にそれぞれ接続する。北辺築地塀と講堂東側の接続部分には掘立柱建物の四脚門が造られる。

中門は明瞭な遺構は発見されていないが、南辺築地塀の高まりが途切れる15 m程度の箇所に３間１戸

の礎石建物の八脚門が想定されている。基壇は東西 11.3m、南北 8.9mで、高さが 0.8～1.0mである。

（２）付属院地・その他の建物

講堂の北側には、講堂と中門を基準とした中軸線上に大房と小子房からなる僧房があり、このうち大房は、掘立柱建物から礎石建物に変遷する。いずれも東西 11 間、南北４間の東西棟で、礎石建物は東から５間目と６間目の間に馬道があり、その南側には講堂と接続する軒廊がある。東西２間で１房をなす房を５つもつ構造である。小子房は４時期ありいずれも掘立柱建物である。

大房の東西両側には、築地塀の東西辺の北側にそれぞれ東倉と西倉があり、西倉の南側には経楼がある。東倉の南側には、削平により失われた鐘楼があったものとみられる。

これらの建物のほかに、西辺築地塀の約 22 m西側に東西５間、南北４間で礎石建物の西方建物、西南建物、築地塀西南隅の南西約 17 mの箇所には、一辺９mの正方形の基壇上に東西３間南北３間で礎石建物が推定される、西南建物がある。この西南建物は周囲に縁をもつ方形の仏堂である可能性が指摘されている。これら西方・西南方の建物には、近接した箇所から集中的に出土している篦描文軒平瓦が葺かれたものと考えられる。西倉の約 25 m北西側には東西棟の南側柱列の可能性のある、東西５間以上の掘立柱柱列がある。また、中門の南側では、竪穴建物が６棟、瓦を多用した特殊遺構１基なども見つかっている。

２．出土遺物

瓦、硯、土器、土製品、石製品、金属製品などが出土している。

瓦は講堂の基壇周辺をはじめてとして多く出土しており、その種類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦がある。調査で出土した軒瓦の大半を占める重弁八葉蓮花文軒丸瓦および二重孤文軒平瓦が創建瓦で、多賀城政庁創建段階の瓦と同種である。多賀城から出土の無い資料として、鋸歯文縁細弁蓮花文軒丸瓦（多賀城分類番号 230・231）（第５図－１・２）、旋回文軒平瓦（３）、鬼瓦には隅丸方形で蓮花文を四個並べた文様のもの（951）（７）、方形で中央に大きな蓮花文を置いた文様のもの（950）があり、950 には文字の無い 950A（４・５）と左下端に「小田建万呂」の文字を記した 950B（６）がある。

土器は「寺」「寺司」や仏教の儀式の一つである「花會」を意味するとみられる「花会」と墨書された須恵器（８・９・10）、須恵器水瓶（11）、灰釉陶器浄瓶（12）、鉄鉢形須恵器（13 ～ 16）が出土しているほか、須恵器鉢には京都府亀岡市篠窯産と指摘される（高橋 2021）資料がある（17・18）。そのほか仏教関連遺物として注目されるものには、瓦塔（24）、泥塔（22・報告書中では土塔）、土製の塑像（21）、塔を描いた平瓦（23）などがある。このうち泥塔は 2,694 個と大量に出土しており、その多くが講堂周辺からの出土である。

３．変遷と特徴

出土瓦の大半が多賀城跡政庁第Ⅰ期の瓦の同種であることから、当廃寺の創建段階が政庁第Ⅰ期と同時期と考えられる。同じく第Ⅳ期の瓦出土状況から塔・金堂の第２次補修および塔・講堂の火災が第Ⅳ期以降とみられる。報告書中では、伽藍地の建物および、大房・小子房・東倉・西倉・鐘楼・経楼は主にその位置関係から創建当時からあったものと検討されているが（『多賀城廃寺跡』）、発掘調査成果を再検討した岡田氏は（岡田 2004）、Ⅰ期からⅤ期までの変遷を設定し（第４図）、塔基壇第１次補修が施され講堂西側の四脚門が取り除かれるⅡ期が政庁第Ⅱ期頃、築地塀北辺が取り除かれ、東西の倉・鐘楼・経楼が建ち、大房が礎石建物となるⅢ期が９世紀以降、塔・金堂の基壇周辺に第２次補修が施され、西方建物、西南建物が建てられるⅣ期が９世紀末～ 10 世紀初め、火災焼失後に講

堂基壇上に礎石建物、金堂基壇上に小堂が建てられるⅤ期が平安時代後期以降としている。なお、岡田案のⅡ期については、柳澤氏によって貞観地震後の復興に伴う補修である可能性が指摘されている(柳澤 2013)。

また、第２次補修の時期を示す遺物として、塔基壇南側の第１次補修基壇裾部の上部から出土した灰釉陶器埦と段皿（第５図－ 19･20）がある。11 世紀後半頃と報告されているが（『多賀城廃寺跡』)、前述の岡田氏による検討で 10 世前半との年代が示されているほか、多賀城跡調査研究所による再検討の結果（多賀城研 2020)、前者の埦が尾野善裕氏による編年（尾野 2008 など）のⅥ期新段階（890 年頃～ 920 年頃)、段皿が同じくⅥ期中段階（860 年頃～ 890 年頃）と年代観が改められている。これら以外にも、終末を示す遺物の一つとして現在では年代観の改められた灰釉陶器が挙げられているなど、各遺構の変遷や終末については再考の余地がある。

また、伽藍配置が北で８°ほど東に偏る中軸線をもつ理由としては、東西約 90 m、南北約 120 m の南北に長い平地を丘陵上に確保するための工夫が考えられる。また、多賀城跡外郭南辺と直交する方向であるとの指摘もある（桑原 2006、進藤 2010)。観世音寺式伽藍配置は、太宰府市観世音寺跡や多賀城廃寺跡など東西の重要拠点を中心に分布し（奈良文化財研究所編 2013)、同じ伽藍配置を持つほかの寺院と共に「外敵から仏法で日本列島を守護する、鎮護国家の寺院であった」（貞清・高倉 2010）ことが指摘されている。

寺号については、当廃寺跡は文献上には全く記されておらず不明であったが、遺跡西方約２km にある山王遺跡東町裏地区の 10 世紀前葉に降下した十和田 a 火山灰の前後の層から出土した、万灯会等の仏教行事に用いたと考えられる 200 点を超す土器群の中に、「観音寺」と墨書された土器が含まれていたことが特に注目され（第６図)、「観音寺」（多賀城市 1991）または「観世音寺」と呼称されていた可能性が高いことが指摘されている（平川 2000)。当廃寺跡と観世音寺跡の寺号や伽藍配置に共通性が見いだされる点は、共に国家の周縁地域に設置されるその立地と共に注目される。

関連文献

石松好雄 2007「観世音式伽藍配置について」『観世音寺－考察偏－』九州歴史資料館 pp. 205-212

岡田茂弘 2004「多賀城廃寺の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』p. 1-16

尾野善裕 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯群跡」『来姓古窯群跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 31 集 pp. 77-92

桑原滋郎 2006「六　天平産金と国分寺」『古代を考える　多賀城と古代東北』pp. 217-235

斎藤忠 1975「Ⅱ　寺院跡」『新版仏教考古学講座　第二巻』

貞清世里・高倉洋彰 2010「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学　第 30 号』pp. 21-46　日本考古学協会

進藤秋輝 2010『古代東北統治の拠点・多賀城　シリーズ「遺跡を学ぶ」066』新泉社

多賀城市史編纂委員会 1991『多賀城市史　第４巻　考古資料』

多賀城市史編纂委員会 1997『多賀城市史　第１巻　原子・古代・中世』

多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡　政庁跡本文編』

多賀城跡調査研究所 1976・2008『年報 1975・2007』

多賀城跡調査研究所 2020『多賀城施釉陶磁器　宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ』

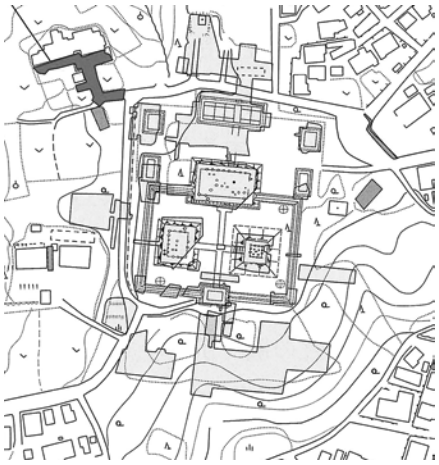
高橋透 2021「陸奥国中部の様相－多賀城跡･多賀城廃寺跡を中心に－」『第 48 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

奈良文化財研究所編 2013『発掘調査の手引き』

平川南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館

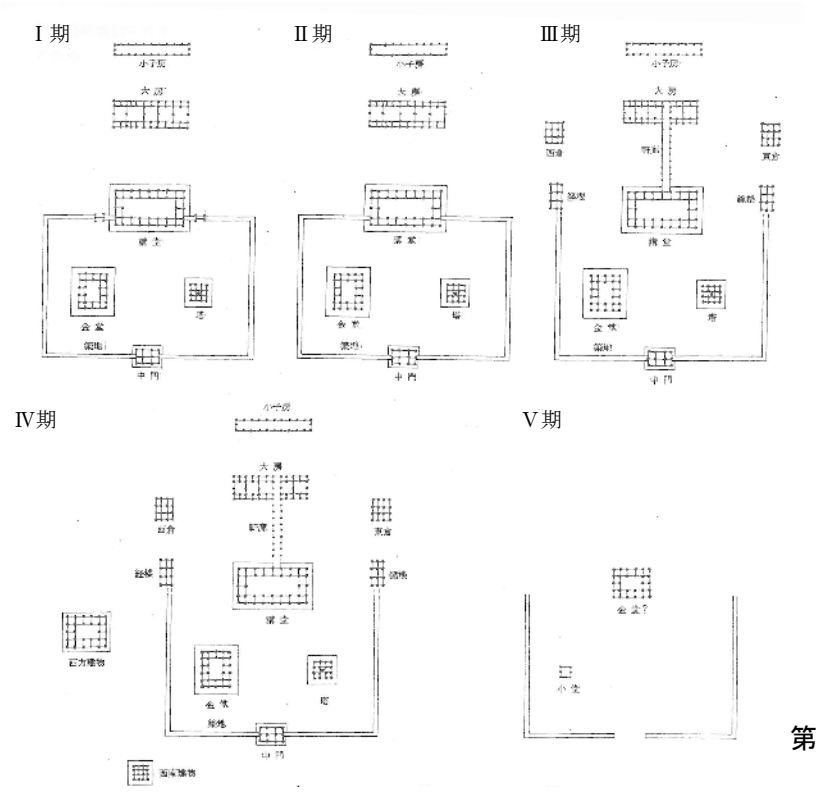
宮城県教育委員会・多賀城町 1970『多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡－』

柳澤和明 2011「国府多賀城の祭祀」『東北歴史博物館研究紀要 12』pp. 29-54

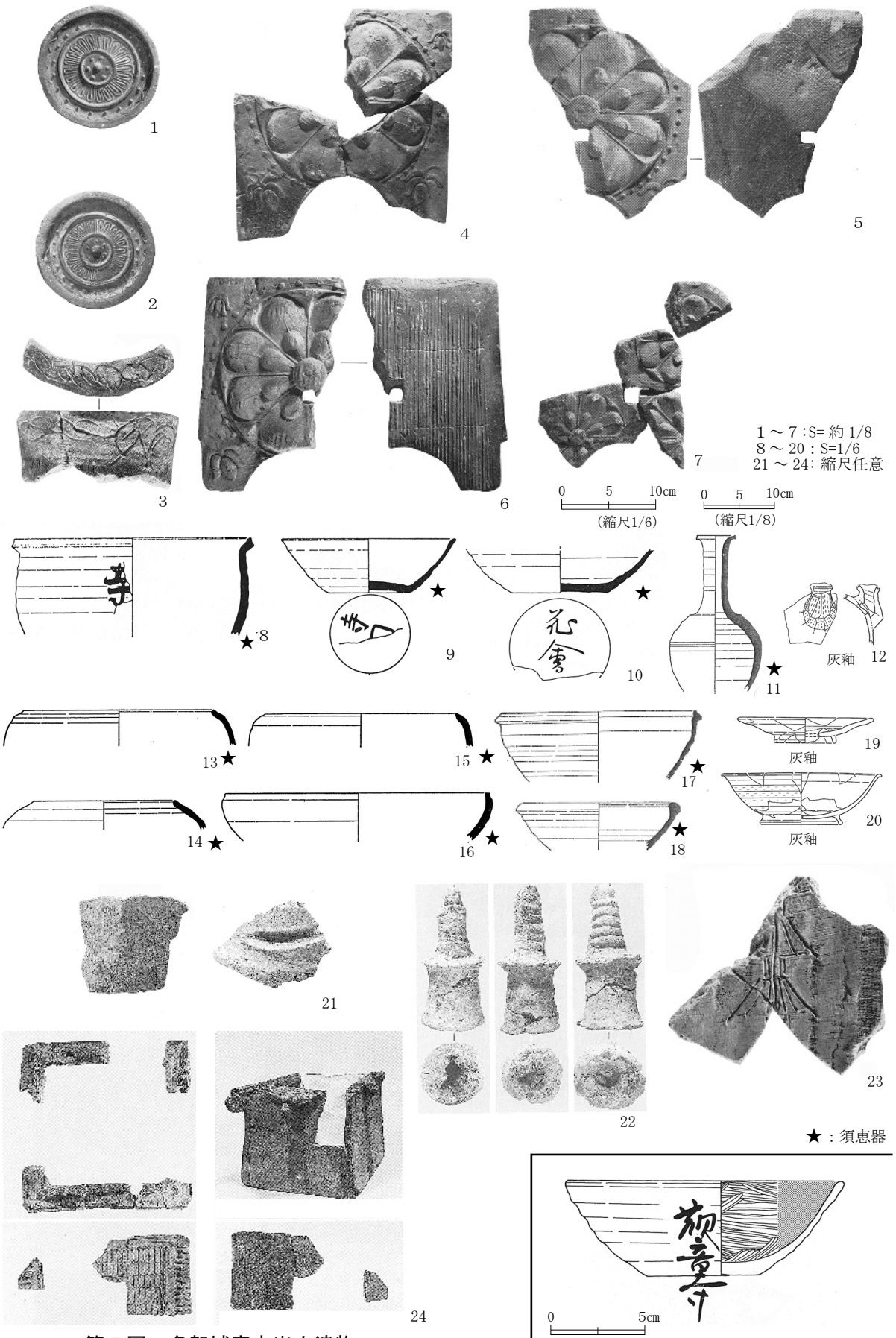


第２図　既往調査区（多賀城研 2008）

第３図　伽藍配置と周辺の地形
（宮城県・多賀城町 1970）

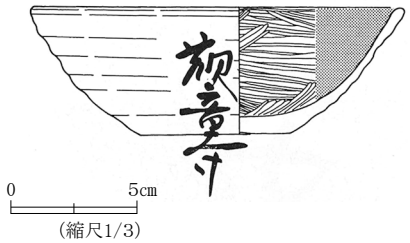


第４図　岡田茂弘による変遷案
（岡田 2004）



第５図　多賀城廃寺出土遺物

(多賀城市 1991、宮城県・多賀城町 1970、多賀城研 2020 から作成)



第６図　山王遺跡出土墨書土器

(多賀城市 1991)